

川中島白桃(かわなかじまはくとう)

育成者号：池田正元(長野市川中島
四ッ谷)

来歴：混植園での偶発実生
(長野経済連：くだもの品種名鑑より)

特 性

■栽培特性

若木時代の樹姿は、やや直立性であるが、樹齢が進むとしだいに開張性を示す。樹勢は中～やや強で、「白鳳」、「愛知白桃」と同程度である。複芽中心で葉芽や花芽の着生は多いが、着果過多等で樹勢が衰弱すると、単芽の割合が多くなる傾向にあり、ひび等の果面障害の発生も多くなる。

開花期は、育成地(長野市)で4月下旬、「白鳳」とほぼ同時期である。花は普通咲きで、不完全花の発生は少ない。花粉がないため、授粉樹を必要とする。授粉樹は、開花期の早いネクターリンや開花期が近く花粉量も多い「白鳳」、「あかつき」等が適する。授粉樹の混植割合は、20～30%程度とし、計画密植園では、授粉樹が間伐されないように、注意して混植する。開花期に低温が続く場合や単植園では、人工受粉を行い結実確保を図る。生理的落果は少なく、豊産性で成木園では10a当り約4tの収量が見込める。

収穫期は満開後約125日前後、育成地で8月下旬～9月上旬に成熟し、「愛知白桃」、「長沢白鳳」より約7日遅く、「ゆうぞら」より約10日早い晩生種である。

無袋栽培では、ひび等の果面障害が発生するため、安定生産を図るには有袋栽培が前提である。除袋時期が遅れると、鮮明な着色に仕上がらないため、収穫予定の7～10日前には除袋を行う。

■果実特性

果形は扁円形、果頂部の深さは中程度で、梗あ部の深さはやや深い。1果重は300g前後と大きく、果実の揃いは、極めて良好である。

果皮の地色は白色、果皮の着色は良好で、果面全体がほかし状に着色する。毛じは密で長く、果肉色は白色、果肉内の紅色素は少ない。肉質は溶質で、果汁は多く食味は良好である。糖度は13%前後で、酸味は少なくpH4.6前後である。果実の日持ち性は良好で、「白鳳」、「愛知白桃」より優れる。核は粘核で、やや大きい。核割れは少なく、商品化率は高い。

■病虫害抵抗性および栽培上の留意点

病害虫に対して、通常の防除を行っていただければ特に問題はない。安定生産を行うためには、授粉樹を混植して結実確保に努める。また、果面にひびや裂果が発生しやすいので、有袋栽培を行う。

■地域適応性

長野県の基幹品種として、長野市を中心とする北信地方の平坦部で栽培が多い。県外の主要なモモ産地では、晩生種に有力品種が少ないこともあり、本品種が注目されており、全国的にも増加傾向にある。しかし、西南暖地では、日焼けによる果肉褐変が発生する場合がありますので、注意が必要である。土壌の適応性は比較的広いと思われるが、土層が深く、保水力のある肥沃地が適している。

(宮沢孝幸)